

センス・オブ・ワンダーとは、「自然の神秘さや不思議さに目を見張る感性」

自然の中でおもしろいものを見つけて無意識によろこびの声を上げると、子どもたちはそれに注意を向けるようになる。そして自ら発見の喜びに胸をときめかせて身体で自然を覚えるようになる。

まだ物事の判断力がない子どもたちには、そうした感動を分かち合う大人がそばにいる必要がある。

大人たちの多くは大人になる前に澄み切った洞察力や、美しいものや畏敬すべきものへの直観力を鈍らせて、自然と言う力の源泉から遠ざかる。そして「自然のことなど、どうして子どもに教えることができるのか？ そこにいる鳥や植物の名前すら知らないのに」と言う。

しかし美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なるものに触れた時の感激、思いやりや憐れみ、讃嘆や愛情など様々な感情が呼びさまされる時、人はそれをもっと良く知りたいたいと思うようになる。子どもたちには単に知識を教えることよりも、彼らが知りたがるような環境を作ってやることの方が大切である。自分に自然の知識が無いとしても、星をながめ、風の音を聞き、鳥や虫の声を聴いてその感動を分かちあうことができる。一粒の種子や、芽生えでさえも。

「身体で感じ取って覚えたことは忘れずに記憶に残る」

自分の感受性に磨きをかけるとは、目、耳、鼻、指、舌を使って自然を楽しみ味わうことである。

人は自然を目にしていながら、本当は良く見ていないことが多い。植物や昆虫など、見ているとその詳細は知らない。しかし虫眼鏡で微小な世界をみたり、自然の音や声に耳を澄まし、木の肌や葉に直接触れたり、それを匂い、野イチゴを採って食べるなど、身体で感じ取って覚えたことは決して忘れない。

「自然の感性を強めることの意味」

自然の美しさや神秘を感じ取れる人は、科学者であろうとなかろうと、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることは決してないであろう。例えば生活の中で苦しみや心配事があっても、必ず内面的な満足感と、生きていることへの新たなよろこびに通じる小道を見つけ出すことができる。地球の美しさに思いを巡らせる人は、生命の終わりの瞬間まで生き生きとした精神を持ち続けることができる。

海洋学者オットー・ペテルソンの言葉

彼は93才で亡くなったが、いつも生命と宇宙の神秘を愛していた。そして地球上の景色をもうそんなに長くは楽しめないかと悟った時、息子に次のように語った。「死に臨んだとき、私の最後の瞬間を支えてくれるものは、この先に何があるのかと言う限りない好奇心だろうね」と…。

「センス・オブ・ワンダーの結びの言葉」

自然に触れるという終わりのない喜びは、決して科学者だけのものではない。大地と海と空、そしてそこに住む驚きに満ちた生命の輝きのもとに身を置くすべての人が手に入れられるものである。